四国農学連報
第20号
発行者
四国地区農業大学校
学生連盟
編集
高知県立農業大学校
学生自治会

農大の生活を経て

四国地区農業大学校学生連盟会長
高知県立農業大学校学生自治会長
山下美咲

私が農業大学校へ入学したのは、第一志望であった高知大学の受験を失敗してしまい、途方に暮れていた時に、高校時代の担任教師に、農業大学校を紹介してもらったことがきっかけでした。大学よりも実践的に農業に取り組むことができ、短期間で知識や技術を身につけられると聞き、私は入学を決意しました。

農業大学校へ入学してからは、私の想像以上に実践的で、実習で経験しながら学ぶという事ができました。そして将来、私と同じように農業へ携わりたいという思いのある仲間とも出会い、たくさんの思い出ができました。農業大学校の恒例行事である、よさこい鳴子踊りや、農大祭など、今でも鮮明に思い出すことができます。しかし、それらのイベントを踏まえた上で、私の学校生活で一番印象深いことは学生自治会の活動です。

私は、一年生で寮生会の役員に入り、そして二年生では自治会長を務めることになりました。この自治会長を任されたことが農業大学校での思い出をたくさん作ることができた大きな要因だったと思います。初めは、会長なんて役職を私が務められるはずがないと、のしかかる責務に悩んでいました。しかし、自治会役員の仲間たちと協力して活動していくなかで、私の気持ちも少しずつ変わっていきました。

そして、農業大学校の一番の学校行事であるよさこい鳴子踊りは、私たち自治会が初めに取り組んだ大きなイベントでした。一年生の時は、私は寮生会の役員としてサポートするだけでしたが今年度は自治会として、中心になり行事を進めていかなくてはなりませんでした。しかし、いざ取り組んでみると学生皆の気持ちもまとまらず、本番に向けての練習も集まりが悪く、なかなか思うように取り組むことができませんでした。私は、会長として皆を引っ張っていく立場であるのに、自分の不甲斐なさに悩んでいましたが、しかし、ほかの自治会の仲間たちや、クラスメートが支えてくれ、私も期待に応えようと頑張ることができました。そして、本番が近付いてくるにつれ、次第にモチベーションもあがり、実際、よさこい祭り本番には皆ひとつになり、とても良い思い出になりました。結果までにいろいろと苦労はありましたが、こうした障害を乗り越えることで、また一つ成長することができるのだと思います。初めは嫌でたまらなかった自治会長もサポートしてくれる仲間がいるから、私も頑張ろうという気持ちが持てました。

一人であればできないことも周りと協力していくことで乗り越えていける。これは、農業に関しても全く同じことだと思います。農業も一人ではやっていくことはできないし、人々と助け合い、協力して成り立っています。この人と人が連携できる環境を、自分の地元でも作っていき、地域農業をもっと発展させられればと思います。

この学校生活の経験を自分の将来の土台に、これからの農業に貢献していきたいです。

今を生きよう

高知県立農業大学校
校長　横山好史

そうだ　うれしいんだ　生きる喜び
たとえ胸の傷が痛んでも
何のために生まれて　何をして生きるのか　答えられないなんて　そんなのは嫌だ
今を生きることで　熱いこころ燃える
だから君は行くんだ　微笑んで

ご存じアンパンマンのマーチの一節です。昨年は色々なテレビ・ラジオ番組でこの歌詞が取り上げられましたが、この歌詞をあらためて見てみると、その意味の深さを私も感じました。

アンパンマンやこの歌詞を作ったやなせたかしさんは、昨年亡くなりました。人生は人それぞれですが、皆さんも良く知っているように、彼の人生の功績は素晴らしいものでした。

やなせさんは「ナスのナコちゃん」など野菜のキャラクターもたくさん作ってくれていて、高知県産野菜のパッケージに印刷されて店頭に並び、子供達が野菜好きになるための業績も残してくれています。ふるさとにアンパンマンミュージアムを建て、たくさんの観光客でにぎわってもいます。

人は誰もいつかは死んでしまいます。私やあなたは「何のために生まれて　何をして生きるのか」に答えられる人生を送っているでしょうか。

たとえ胸の傷が痛んでも生きる喜びがうれしいように、自分の弱さを乗り越えて生きる喜びを感じていますか。

やなせさんのような素晴らしい業績は残せなくても、自分で納得できるような人生を過ごしているでしょうか。

私の人生を振り返った時、「あの時ああすればよかった」「もうちょっとやっておけばよかった」・・・胸の傷を数え上げれば果てがありません。同じ思いの方も多いと思います。でも「今を生きることで　熱いこころ燃える」と、やなせさんは今を生きることの大切さを言ってくれています。

では「今を生きる」とはどういうことでしょうか？

今あなたの目の前には、農大での勉強や生活があります。その勉強や生活をしっかりと生きているでしょうか。あなたの周りでは、農産物の販売価格は低迷しているのにA重油価格は20年前の約3倍になるとか、TPPの協議や、福島原発事故、憲法議論等、これからの農業やくらしに大きな影響が予想されることが様々ありますが、こうした今をしっかり見つめていますか？

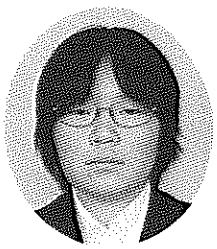
やなせさんはこういう歌も作りました。

ぼくらはみんな　生きている　生きているから　歌うんだ
ぼくらはみんな　生きている　生きているから　かなしいんだ
手のひらを太陽に　すかしてみれば
まっかに流れる　ぼくの血潮（ちしお）
ミミズだって　オケラだって　アメンボだって　みんな　みんな生きているんだ　友だちなんだ

たとえ今の自分に失敗や弱点ばかり見えて胸の傷が痛んでいても「みんな生きているんだから、今をしっかり生きて行こうよ」と、やなせさんに呼びかけられているような気がしませんか。

農大に入学して思うこと

香川県立農業大学校
野菜園芸コース　一年
増田　夕美江



農業大学校に入学し、楽しいことや大変なことが多い一年でした。そのため、長いと思っていた一年があっという間でした。

私は農業に興味があり、高校は農業科の学校へ進学しました。その中でもっと専門的なことを知りたいと思い農業大学校へ入学しました。

初めの頃は、まあいけるだろうと思っていたけれど、学んでいくと難しいことばかりで、これはやばいと思いました。特に、講義では、土壌の分析や農薬についてなど、専門的なことばかり出てきて分かりませんでした。そのため、ついていくのが大変でしたが、最後には分かることが増えてきました。それに、法人のことなどしらなかったことも知れて良かったです。実習では一人一畝を管理しなければならないので大変でした。

高校の時にしてきたことが生かせることも少しはありましたが、ほとんどがやったことのないことだったので、いろいろなやり方があるのだと知りました。

それから農家さんへ十五日間実習に行かしていただきました。私は、ミニトマトを栽培している農家さんにお世話になりました。その農家さんは八月に定植をして約一

年間収穫をしていました。あることは知っていましたがあまり見たことがなかったので貴重な体験で、たくさんのことを学ぶことができました。中でも誘引の方法にびっくりしました。その方法は、パイプに誘引紐を巻きつけておき、パイプの近くまで伸びたら、上の方の作業がしやすいように、巻きつけてある紐を下ろすという方法でした。

それを見て、作業の効率を良くするためにいろいろと工夫をしていかないといけないのだと思いました。農家さんへ行って大変なこともありました。しかし、現場で行われている作業方法や工夫を多く知れたので良かったと思いました。

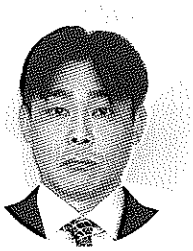
大変なことはたくさんあったけれど、楽しいこともたくさんありました。日々の学校生活では、高校からの知り合いが何人かいたのですぐになじむことができました。そして、一人一人が個性豊かなので、笑いの絶えない学校生活を送っています。

また、部活ではバレー部に入部しました。入部した理由は、あまり運動の得意でない私ですが経験があり、まともに出来そうだったからです。とは言っても下手なので、みんなの足を引っ張ってしまうことが多いです。だから先輩に教えてもらったことはきちんとできるように頑張りました。少しはうまくなったかなとは思うこともあったけど、大会ではやはり足を引っ張ってしまったので、迷惑をかけないようにしないといけないと思いました。

大変なことや楽しいことが多かった一年で、とても濃い一年でした。来年も、楽しい友達と一緒に充実した学校生活が送れたらいいなと思っています。

農業の厳しさや喜びを感じながら

香川県立農業大学校
果樹園芸コース　一年
松井雄治



たくさんの夢や希望、そして少しの不安を持ちながら農業大学校に入学して、早くも一年が過ぎようとしています。母が果樹（桃）や水稲の栽培をしていましたが、私はサラリーマンをして手伝いといっても田植えと稲刈りを少し行う程度でした。

サラリーマンとしての人生に少し疑問を持ち始めた頃、以前母がつぶやいていた「あと五年位で桃の栽培はやめよう」という一言が自分の中で気になり始め、祖父の代から母へと受け継がれてきた水田・果樹園を耕作放棄地にしてしまうのは、あまりにも辛くもったいない事だという思いが強くなり、農業人を目指そうと思いました。

しかし、神戸で生まれ育ち、就職を期に香川に来てサラリーマンしかしていない私は、農業に対してあまりにも無知。母に付いて栽培方法を教えてもらうのも良いが、どうせ一から始めるのであれば、知識や技術を基礎からきちんと学びたいと思い農業大学校への進学を考えました。

この考えを周りの親しい友人等に相談した時、「お前に農業が出来るの？」とか「その歳で今さら・・・」と否定的な意見がほとんどでしたが、母や家族の「本当にやりたい事なら、何も気にせず農業大学校で二年間しっかり勉強してきて！」と言う言葉に後押しされ、意思が固まり入学を決意しました。

私は果樹園芸コースを専攻していますが、農業大学校での講義は果樹栽培だけでなく、農業の歴史や農耕民族学、農業経営論や農業簿記など農業を経営していく上で必要な知識も学びます。また、外部から講師をお招きし、貴重な体験談を聞かせていただける実践講話等もあります。このような多種多様な講義を受けていると、自分の農業に対する無知や考えの甘さを痛感させられる事ばかりですが、一つ一つ確実に身に付けて行きたいと思います。

農場実習では、初めて経験する事ばかりでとても楽しく、興味がどんどん湧いてきますが、戸惑う事も多く、作業を進めるのが遅くなり迷惑をかけてしまう事も多々あります。それでも丁寧に指導してくださる先生方や手を差し伸べてくれる同級生に支えられ、何とか実習をこなしている日々です。

農業大学校での学生生活は、講義や実習を受けるだけではありません。十月には四国農学連スポーツ大会が行われ、他県の学生の方々と競技を通して交流を深め、試合の合間には他校の様子や他校生の将来についての考え等を聞いたりして、とても参考になりました。

十一月には農大ふれあい市が行われ、自分たちが栽培に携わった果実の販売や、しっぽくうどん、キウイジュース、栗の甘露煮の販売もしました。自分たちが作った物をお客様が買い求め喜んでいる姿を見ると、将来、自分が最初から最後まで責任を持って栽培した果実で、この様に喜んでもらいたいと強く思いました。

十月から十二月にかけて、農家実習で農業生産法人に週二回お世話になりました。ここでは実際の果樹栽培から収穫、選果等様々な作業を体験させていただきました。技術を学ぶ農業大学校の実習とは違い、仕事として、商売として果樹栽培（経営）することの厳しさや、作業一つにしても効率よく行うために創意工夫が必要である事を学びました。

農業大学校での学生生活も、残すところあと一年になりました。親切丁寧にご指導くださる先生方、単純作業が続き気が滅入りそうになった時、雰囲気を盛り上げてくれる同級生、そしてなにより私をこの様な環境に置いてくれ、毎日支えてくれている母や家族に深く感謝し、残された貴重な時間で一つでも多くの知識や技術を吸収し、しっかりと身につけていきたいと思います。

農大で学んだこと

香川県立農業大学校
花き園芸コース　一年
十川実佳

私は、今まで全くと言って良いほど農業に関わっていませんでした。田んぼや畑や山も自然がいっぱいの環境にもかかわらず、関わったことと言えば、草抜きと水やりぐらいでした。そのため、作物の特性や栽培技術についての知識は全くありませんでした。

しかし、昔から自然に囲まれて育ってきたため、植物に対する興味を持っており、中でも特に花に対する関心が高かったです。そして、将来はフラワーデザイナーになりたいと思うようになっていました。私は基礎学力が無かったため、普通科の高校に通い、部活で茶華道部に入り、花への関心を高めました。その後専門知識を身につけられる農業大学校への道を選びました。

私の専攻している花き園芸コースでは、県内の主要花きであるキクやカーネーションの切り花はもちろんのこと、ポインセチア、サイネリア等の鉢物やパンジー、サルビア等の花壇苗の栽培方法を、実習を通じて学習します。他に、学校の行事として「四国農学連スポーツ大会」や「農大ふれあい市」があります。

農家実習は、十五日間先進農家に行き、農家さんと一緒に作業をしながら必要な知識を身につけていきます。私は、キクを栽培している農家に実習へ行きました。農家さんでの作業内容は、主にキクの収穫と摘蕾・摘芽で、束作りや定植の作業もさせていただきました。最初は、わからないことだらけで不安もありましたが、一日一日と日を重ねるたびに作業内容もわかるようになり、作業も少しは早く出来るようになって不安もなくなりました。不安がなくなる頃には実習も終わりに近づきとても寂しかったです。十五日間は私にとって、貴重な日々で良い体験でした。

「四国農学連スポーツ大会」では、卓球の試合に出場しました。私は中学校の部活で三年間卓球をしていましたが、その後のブランクもあり体が思うように動けず、チームメイトに迷惑をかけてしまいましたが、全員の協力で準優勝を勝ち取ることが出来ました。

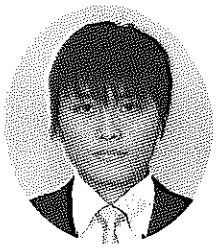
「農大ふれあい市」では、前日に花の販売の準備と、当日にパウンドケーキの販売を担当しました。これも全員の協力で、パウンドケーキは早々に完売することが出来ました。

また、学校での生活で楽しいことは、個性豊かなメンバーと花について学んだり話したりすることです。花き園芸コースのメンバーは、私以外農業高校出身者で、専門知識もあるので、作業方法や専門用語が分からない時などに頼ることが多いです。こんな楽しいメンバーと一緒に勉強できるのも、あと一年ちょっとになりました。

行事を通して、一人では何も出来ないことでも、皆が力を合わせればどんなことでもできることを実感しました。今後は、より一層の思い出になるように勉強に、実習に、スポーツに頑張っていきたいと思います。

農大の一年間

香川県立農業大学校
造園緑化コース　一年
溝渕敏広



私が香川県立農業大学校の造園緑化コースに入学してから、もうすぐ一年が経とうとしています。私が農業大学校に入学しようと思ったきっかけは、高校時代に造園の科目があったのと、家に樹木がたくさん植えてあったことです。高校生の時は造園の授業は少なかったけど、木の剪定や芝張りを習っていくうちにすこしずつ造園に興味を持ち始めました。家では親が木に登って剪定しているので手伝いたいと思い、農業大学校の入学試験を受けることを決意しました。

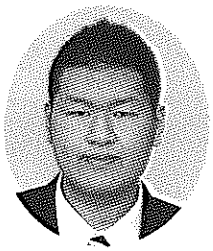
入学当初は、どういう人達とどのような勉強をするのかという期待と、二年間やっていけるのかという不安でいっぱいでした。勉強面では、初めて習う科目が多くて授業についていくのが大変でした。実習面でも初めてのことが多く、よく戸惑っていました。ですが先生方や先輩方、友達に教えてもらいながらすこしずつですが分かるようになってきました。

六月頃からは造園の三級技能検定が近づいてきたということで実技の練習が始まりました。実技の内容は、指定されている二時間以内に所定の位置に竹垣作りや敷石、植栽を行うことです。この練習を本番までの約一ヶ月間農場実習の時間に行いました。練習を始めた頃はどの作業も初めてで、時間内に完成させることができませんでした。ですが先生や先輩に教えてもらいながら練習を繰り返して行くうちに、時間内に完成できるようになりました。本番当日は、試験会場で準備をしながら合格できたらいいなと思っていました。そして猛暑の中、検定が始まりました。制限時間をいっぱいまで使い完成させました。そして合格発表では合格と優秀賞まで受賞することができました。

三級技能検定をきっかけに造園に関してこれまで以上に興味を持った私は、もっと頑張りたいと思いました。来年は二級の造園技能検定があるので合格できるように努力したいと思っています。私は農大で頑張ってきたこの一年間を無駄にしないように、また、残り一年間農大で勉強できるのでいろいろな事に挑戦し、自分が成長できるように頑張って行きたいです。

農大での一年を思い返す

香川県立農業大学校
畜産コース　一年
岡内祐樹

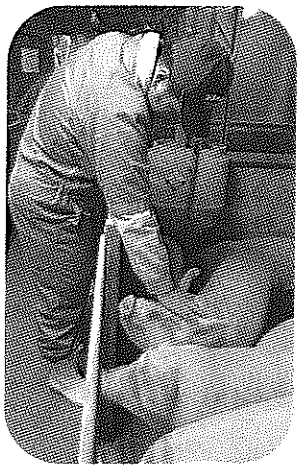


私が農業大学校で学び始めて約一年が経ちました。これから、その一年間の学習を主として振り返っていきたいと思います。

まず、私が農大への入学を希望した理由は、高校時代に鶏卵の生産・加工・販売を行う部門で学ぶ中で、実際に農業で利益をあげるための工夫や手法について、詳しく学びたいという思いを持った事から、農大で学ぶ事を決めました。専攻するコースは、高校で鶏に関わっていた経験から畜産コースを選択しました。

農大に入学してからは、様々なことを学びました。まず、講義では、農業の基礎的な部分を学ぶ概論の授業や、畜産と直接の関係は強くないものの、飼料作物の栽培や堆肥の利用の際に役立つであろう土壌の授業、英語や情報処理のような一般教養等について学習しました。他にも、農業経営や農業簿記といった、農家・農業法人の経営に関わる内容の授業を受け、難しい内容も多く理解しきれなかった部分もあったように思いますが、それだけ中身が濃い授業で、有意義な学習になりました。専門の畜産の授業では、牛・豚・鶏等の家畜の身体の成り立ち、臓器の働き等に付いて学んだ生理解剖や、家畜に与える飼料の成分等について学習した家畜飼養、畜産と環境の関わり方法等について考えた畜産環境等の勉強をしました。高校時代より、詳しく深い部分の勉強ができ、特に畜産の授業では、本当に多くのことを学習し、入学以前と比べて、かなり知識を深められたという実感があります。

次に、実習ですが、現在学校では家畜を飼育していないため、実際の農家や農業法人、県の畜産試験場で実習をさせていただいています。実際に収益を上げるため経営している農家での実習では、農大で学べなかったような経験・知識も得られました。行った作業は、畜種を問わず給餌、畜舎の掃除、徐糞等の共通の一般管理から、養豚農家での子豚の尻尾切りや抜歯、酪農家での搾乳や飼料用作物の刈り取り、肉牛農家での牛の徐角、去勢といったもので、振り返ってみると、割と様々な作業をしてきたのだと思います。また、実習をさせていただく中で、農家や規模等の違いによって作業内容や施設、エサにも違いがある事を感じました。それぞれの農家ごとに、様々な工夫やそれぞれの状況に適した方法で収益を上げているのだと知り、それらの工夫を実際に目にできた事は、本当に良い勉強になったと思っています。



また、夏休みを使った畜産人工受精師の講習も印象に残っています。暑い中での現場実習は、とても大変な思いをしましたが、勉強の甲斐あって無事に免許を取ることができ、努力が報われる事の喜びを感じました。

農大に入学してからの一年間を思い返してみると、想像していたよりも多くのことを経験していたのだと気づきました。これからも、多くの事を経験し、多くの事を学んでいきたいと思います。

これからの農業経営

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
生産技術コース　一年
金喜勝美

私は今春、農業大学校に入学しました。現在二十九歳です。高校卒業後は、ホテルに就職し、八年間コックとして働いてきました。

私の家はイチゴ農家をしています。が…、当時の私は、農業に全く興味がありませんでした。しかし、昨今、各種メディアが取り上げるニュースには、農業に関する話題が非常に多く、徳島県でも、農業を「基幹産業」として位置づけ、「農業人材の育成」、「6次産業化」、「地域資源のブランド化」等に取り組んでいます。社会人として仕事に従事していく中で、少しずつ私の中に、「農業はおもしろい！」、「農業をやりたい！」という気持ちが芽生え、農業大学校への入学を決意しました。

なぜ今、農業が面白くなってきたのか？現在、農業を取り巻く環境は、非常に厳しくなってきていると各メディアが報じています。「農業従事者の高齢化及び減少」、また「TPP」参加後の農業のあり方など、状況は決していいとは言えません。しかし、国や地方公共団体も様々な政策を打ち出しておりますし、それらをいかに地域や農家にとって有利になるよう、「活かしていくこと」がポイントではないかと思います。

また、農業人口が減っているということは、耕作地が余ってきているということです。農地というのは農業をやる上で絶対的に必要なものです。耕作放棄地の問題は、逆に言えば、新規就農しやすく、また小規模な農家でも規模拡大がしやすいというチャンスにもなります。だからこそ、今、新規就農を目指している人が増えているのではないでしょうか。私自身は、新規就農ではなく親が農業をしていますので、学校を卒業後は、「継承」という形で就農します。なので、将来は耕作放棄地をお借りして、規模拡大をしていきたいと考えています。

農業は今、大きな変革の時に来ていると感じています。ただ農作物を作り、出荷するだけでは厳しいのではないかと思っています。もちろん農業の基本はそこなのだけど、これからは、農作物の生産からお客様の手に渡る販売までを十分に意識した取り組みを進めていかなければならないと思います。しっかりと、消費者であるお客様のニーズや要請を捉え、それに対して生産者である我々はどうすべきなのかを考えていかないといけません。「安全・安心」、「販路の拡大」、「広報活動」等、課題は山盛りです。でも、創意工夫と努力で、「儲かる農業」につなげていけると、私は確信して

います。

私が農業をしようと思った時に感じたのが、生産物の原価や営業コストの把握が曖昧なままで経営している人が、少なからずいるということです。これでは、期待される利益も分からず、持続可能な農業経営は不可能です。

また、生産物の販売についても、従来通りのJAや市場への出荷では、生産者が自ら価格を付けることが出来ず、納得のいく利益を追求することは大変難しいのが現状です。これからは、儲かる農業のためには、産直市やネット販売など、自らが価格を決定出来る場所への出荷が必要です。「自らが価格を決める」ということは「次に繋がる価格での販売が可能」だということ。そうすれば生産者のモチベーションもアップし、品質向上にもつながります。

以上のように、今後は、農家も意識改革が必要だと思います。「ビジネス」としての農業経営。これが、今後の農業のスタンダードになると考えます。

農大祭ステージイベントにて

私は、将来、次のような構想を描いています。まず第1に、「現在経営する農業規模の拡大」です。出来れば農業法人化して、会社として経営していきたいと思っています。それは、農業をビジネスにすることにより、利益と家計との分離を明確にしていく狙いもあります。また、生産・売り上げの向上だけでなく、それに伴う雇用の創出も目的の一つです。そうすることで、農業後継者減少の問題を解決できるのではないかと思っています。将来の人材育成を念頭に置いた農業経営をしていきたいと思っています。

次に、「農業を通した地域の活性化」です。農業法人を個人で立ち上げ、経営していくことも面白いとは思いますが、できれば地域ぐるみで事業を展開していきたいと思います。例えば、複数の農家が提携をし、それぞれの特性に基づいた生産計画や販売戦略を立てれば、年間を通して利益が期待できます。また、農家間の話し合いや交流は、各農家の経営改善にもつながります。ビジネスも、最終的には「人」で決まります。より多くの地域の人と人間関係を築き、そのつながりを、拡大していこうと考えています。

最後に、「ソーシャルネットワークサービスを活用した農業経営」です。農業をするうえで、社会情勢や消費者のニーズ把握は不可欠です。日常的にアンテナを張り巡らし、情報収集をしていきたいと考えます。また、広報活動や販路拡大のために、Twitter、Facebook、そしてLine等を積極的に活用します。安全・安心な農産物を消費者に提供できるよう、十分な生産管理に加え、説明責任も果たしていきたいと考えます。

私は、いちご農家の息子ですが、農業に関しては、まだまだ「初心者」です。でも、これらの夢を実現に近づけていく為にも、今、何が必要なのかを常に考えながら行動して行こうと思います。農業に限らず様々な分野の方の意見を聞くことや、多くの人と関わりを持つことで、あらゆる角度でモノを見る力を養っていきたいと考えています。そして、「常識」と言われるものに対しても、常に「課題意識」を持って臨み、できる限り、新しいことにチャレンジしていきたいと思っています。

農業と私

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
地域資源活用コース　一年
片山裕子

農業に興味を持ったきっかけは、小学生時代です。母方の祖父母宅には、裏庭があって祖母が家庭菜園をしていました。祖母が植えて育てていたのは、ピーマンや茄子などです。祖母を手伝って、時々水をやり、雑草抜きを手伝って、収穫も一緒にして、夕飯にその野菜たちが並んでとても嬉しかった事がそもそものきっかけです。県外に住んでいる父方の祖父母宅でも、祖母が家庭菜園を作っていました。遊びに行った時には、祖母が作っているきゅうりやネギやミニトマトを収穫させてもらいました。やはり収穫した野菜を楽しく食べた思い出があります。

高校に進学する時は、中学校の先生から勝浦高校の園芸福祉科を進められました。その時も、小学生時代の思い出から、楽しいかもしれないと思って進学することにしました。

高校進学後はまず土づくりから始まり農業の基本を教えてもらいました。一年生で初めて小玉スイカを作り、家に持って帰りました。祖父と祖母、両親や弟にも食べてもらいました。「甘くておいしいね。上手にできたね。」とみんなに言ってもらえて大変うれしかったです。他にもメロン、さつまいもや色々な作物を育てて収穫後食べさせてもらえて、楽しかったです。上勝の棚田にも手伝いに行って、耕耘機での土起こしから田植え・草刈り、最後の鎌での収穫までしました。最後に収穫したお米で作ったおにぎりを食べました。美味しかったです。

高校の授業では、高校の近くにある勝浦病院に育てた花の寄せ植えをしに行ったり、クリスマスの飾りを施しに行ったりしました。患者さんが喜んでくれて、花が持

実習の合間に

つ人を癒す効果を実感しました。

高校の部活動では、バイテク部に所属しました。バイテクの技術を使って絶滅危惧種に推定されている「ジンジョウユリ」や上勝町の花「アサマリンドウ」の栽培、自生地の復元という地域の環境保全活動にも取り組みました。先輩から引き継いだ活動でしたが、今後も継続した活動が必要なので後輩達には頑張って欲しいと思っています。

「勝浦塾」という就労体験ではJA東とくしま上勝支所で「いろどり事業」を見学、体験しました。高齢者の方々が数多く活躍されていることを実際に目にし、商品のシール貼りを手伝いました。

高校卒業後の進路は、農業関係企業への就職はあまり求人がありませんでした。それで、せっかく農業に興味のある同級生も他の業種に進学、就労することを目にしてきました。私は卒業後に農業関係の事業への就職を目指すために、農業大学校へ進学することにしました。農業を守るためには新規就労者の確保と育成が重要とされているのに、農業に興味のある同級生達が農業に就労出来ないことには、矛盾を感じました。

農業大学校へ進学後は高校までとは全然違って本格的な農業の授業で驚きました。知らないことがたくさんあって戸惑いながらも実習や授業を受けているうちに少しずつわかったように思います。やっぱり私は、農業が好きなのだと実感できました。

農産物産直市は、安心安全で新鮮な農産物が安く購入できると人気を集めていますので農業大学校でも、週3回産直市を開いています。その日によって販売する作物は違いますが地元の方々に新鮮で安心・安全な商品を販売していることを誇りに思っています。

産直市は販売の実習も兼ねていますので、実際に販売してみたときに、購入者の方から作物の作り方（農薬の使用の有無）や作物の調理の仕方についても聞かれました。今後は、口で説明するだけではわかりにくいので、ポップ教室の実習も生かしてもっと勉強して、色々な情報がよくわかるポップを作って、作物をより多く売れる様にしてみたいと思いました。

農業は安心・安全な作物を作るだけでなく、販売方法を工夫するには経済学部、食品の加工法を改良するのには工学部、機能性食品を特定健康食品（トクホ）として販売するには、臨床試験が必要になるので医学部というように色々な分野との連携をすることによってまだまだ色々な可能性が開ける分野だとも知りました。農業は奥の深い学問だとつくづく思いますし、日本国民の健康の維持・増進に関係している大切な職業だと思います。

これまで先人たちは、空気や水・土壌を維持・浄化することによって、水源や環境・国土の保全を図り美しい景観を維持して、日本文化を継承してきました。日本の農業は自然に対する感謝と畏敬の念を忘れず、家族経営で集落が協力し、条件の不利な中山間地が多い中で歴史を重ね工夫をして発展してきたと思います。その伝統を伝承していくことはとても大切なことだと考えます。現在、伝統を紡いできた方々は高齢化していますので、伝承までの残された時間は少ないと危機感を感じます。私も伝統を伝承する一人として少しでも役に立てる様になれたら良いなと思っています。

また機会があれば、一度海外での農業実習を体験してみたいと思っています。今のままでは全然勉強が足りないので、これから地域の農業の先輩方や海外の農業のやり方も学んで、自分で育てた野菜や果物をまず祖父と祖母たちに食べてもらいたいです。

それから自分で育てた野菜とかを加工して、商品にしてみたいと思います。その商品を母校である小松島西高校勝浦校でも販売してみたいです。

豊かさを求める会社へ

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
アグリビジネスコース　二年
徳島農大「そらそうじゃ」代表取締役社長
樫本豊種

徳島農大「そらそうじゃ」は、三年前の平成二十二年十月二十五日に、学生が運営する模擬会社として設立されました。毎年、卒業式前日に、定時株主総会が開催され、役員の退任と選任が行われています。私は、4期目の代表取締役社長として昨年の三月に選任されました。

徳島農大「そらそうじゃ」は、クラブ活動ではなく、農業大学校の教育の一環として講義や実習内にプログラムされ、実践的な学びの場として機能している組織です。「そらそうじゃ」の社名は、徳島の方言で、「そうですね」という同意と共感を意味する言葉であり、社員に求める姿勢として、経営理念に掲げられています。

私は、就任時に「プロジェクトの成功が、そらそうじゃの成功」という経営目標を掲げるところから始めました。学生全員が、地域社会に貢献し、自らを成長させるプロジェクト（卒論研究）を推進し、成果を上げることができれば、「そらそうじゃ」の経営理念に少しでも近づくことができるのではと考えたからです。「そらそうじゃ」の経営理念の冒頭には、「豊かさを求める会社を目指す」と記載されています。私は、この理念に少しでも近づきたいと思いました。

私のプロジェクトは、「赤ソラマメの6次産業化プロジェクト」と題して調査・分析を進めてきました。プロジェクトの目標は、赤ソラマメの生産性、加工性、流通性を調査・分析し、将来の赤ソラマメの6次産業化の可能性について総合的に評価することです。これにより良好な結果を得ることができれば、さらに地域の振興に貢献するという目標を達成することができます。

「そらそうじゃ」で6次産業化した商品は、農大で伝統的に作られてきた阿波晩茶や南高梅干の他、二期目で開発したみかんジャム、三期目で開発した柿の葉茶があります。そして今期の私は、赤ソラマメを使った加工品を商品化し販売しました。また、昨年から製菓会社と共同で商品開発するプロジェクトが始まり、先輩が白ナスのスイーツを商品化しました。今期は十以上の試作品を熱意と意気込みのある学生が制作し新たな商品が生まれようとしています。

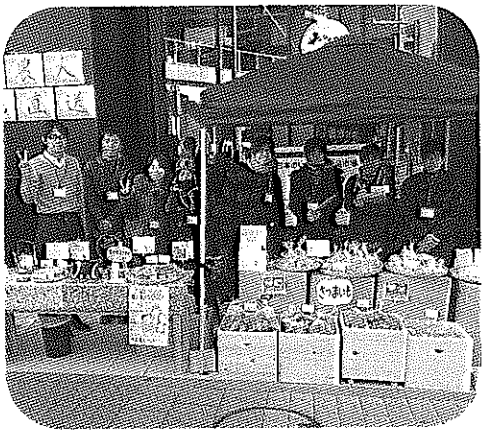
十月は大阪で、十二月は東京で、農大商品の販売を行ってきました。目的は、大消費地域における販売を学ぶこと、消費ニーズの違いを感じること等です。商品パッケージや商品ポップ、ディスプレイ方法、

チラシやタブレット端末の活用、フェイスブックによる情報発信、試食試飲等、アウェーの中でどのようにすれば売れるのかを学生全員で考え実行してきました。

このような販売促進活動を日ごろの直売所でも行ってきたこと、生産力を維持するために圃場管理や栽培管理を学生で協力してきたこと、また、農林水産総合技術支援センターの建物内に移転したこともあって今期の売上は、前期を上回る成果を得られています。

社員全員の努力の賜物（利益）を農大の学生らしい行為で社会に還元していきたいと考えています。例えば、社会福祉、環境美化、地域活性、農地の維持や保全、動物愛護等、地域社会に役立つことに、「そらそうじゃ」の利益を活用する仕組みを、在任中に構築したいと考えています。

生産し、加工し、流通し、そして社会に利益を還元する取り組みを確立することができれば、社員やお客様、そして地域の皆様に「豊かさを感じていただける会社」に成長できると確信しています。

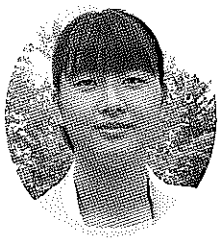


東京販売実習にて

私は、この仕事の経験により得られた知識や人脈を大切にし、6次産業化を実践する農業経営者を目指したいと思っております。すでに、老舗の醤油会社と赤ソラマメを使った商品開発を始めました。今後も自分で栽培した赤ソラマメから新しい商品を生み出していきたいと夢を抱いています。

馬と私～牧場経営を夢見て～

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
地域資源活用コース　二年
塩野　未来



私は幼い頃から馬が好きで、将来は牧場で働き、サラブレットを育てたいと思っています。私が馬に興味を持つようになったのは保育園児の時で、馬好きの姉は小さな私に馬の写真を見せてくれたり、毛色の違いを教えてくれました。また、小学校の時に家族で行った乗馬クラブで、実際に馬の走っている姿やつぶらな瞳を見てますます好きになりました。高校の修学旅行で行った北海道でも、初めて乗馬を体験し、改めて夢を実現させたいと実感しました。しかし、馬の専門学校は簡単に入れるものではなく、多額な費用がかかり、親にも負担がかかります。そこで、私は農業大学校を進学先に選びました。それは馬の仲間であるポニーだけでなく、牛や鶏等の家畜もいて、飼育ができることで馬の扱いに少しでも慣れることができ、尚かつ大型動物にも慣れることができると思ったことと、金銭的にも他の大学より親への負担が軽かったためです。

農業大学校では家畜の世話や研究ができる「地域資源活用コース」へ進みました。昨年は、ポニーの飼育係を任せていただき、それと同時に牛の管理もしていました。現在は、週に三日、農大から十三キロ北にある「畜産研究課」で乳牛の飼育・管理を学びながら、「簡易な体温測定を行うことで牛の健康状態を知る」と題した卒業研究に取り組んでいます。畜産で、育ててきた牛や鶏は、最終的には食肉となり、人間の栄養となり、畜産農家の収入となります。そのような観点から、私たち人間は家畜に感謝し、飼育期間中は心地よい生活環境を与えてやりたいと感じるようになりました。

私は、学校外でも動物とふれあう機会を持っています。昨年の夏休みには、一週間という短期間ではありましたが、「徳島乗馬クラブ」で研修を受け、馬の体の洗い方や馬房の清掃、ボロとりの仕方から、乗馬の仕方まで教えていただきました。私が想像していた以上に、馬一頭一頭に対して飼育・管理することの大変さ、責任の重さを知り、改めて自分の考えの甘さや精神面での弱さを認識しました。

また、将来畜産に携わる者として、資格も必要になりますので、今年の夏休みには、「家畜人工授精師」と馬や牛の売買ができる「家畜商免許」を取得しました。

私は「牧場で働き、サラブレットを育てたい」という夢を実現するための第一歩として、来年度より北海道の「新得町立レディースファームスクール」で、「畜産経営」について深く学びたいと思っています。夢への実現に向けて、今の私に足りないものは、経営面での知識と技術です。また、親元を離れて一人暮らしをすることにも不安を感じています。是非とも、畜産の本場である北海道において、幅広い知識と教養、実践力を持った、人間的にも強い女性になりたいと思います。

「レディースファームスクール」では、畜産農家で実際に研修をし、経験を積むことができると聞いております。全国から集まった同じ夢を持つ同志と情報交換をし、切磋琢磨しながら集団活動ができるというのは大きな魅力です。彼女たちと将来の夢を語り合い、できれば一生涯支え合える友達になりたいと考えています。

卒業後は北海道において畜産経営をしている法人・企業等に就職して、十分な知識・技術・経験、そして忍耐力を身につけたいと考えます。お金を貯め、できれば北海道の大自然の中で牧場経営をしたいです。簡単なことではないですが、あきらめずに頑張っていきたいです。常に「動物福祉」という理念を持ち、「家畜に対して最高の愛情と敬意を持った経営者になりたい！　飼育・管理では誰にも負けない人材になりたい！」と考えています。そして、ゆくゆくは、私と同じく馬が大好きな姉も北海道に呼び、共に牧場で働きたいと思っています。

私は、「飼育する馬達も、私自身の家族も、幸せに暮らせることができる！　従業員や地域の人々、そして、そこを訪れた人達も笑顔に包まれる！」そんな愛情に満ちた牧場を作っていきたいと思います。そんな日が来ることを信じながら、私はこれからも、畜産の勉強に邁進していきたいと決意しています。

農大での学びを実践に

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
生産技術コース　二年次生
野田克彦

私は、農業大学校へ入学するまで農業について学んだことが無く、正直入学するまでの農業に対するイメージとして、地味・汚い・きつい・低収入といったマイナスの要素が自分の中で大きく占めていました。しかし、そんな私が今では「農業の楽しさ、農業の可能性」に魅せられ、農業無くしては今の自分を語ることができないなど2年前の自分との違いに驚く毎日を過ごしています。

今からそんな私の農業に対する先入観を一八〇度変えた人たちをご紹介しましょう。まず、農業の基礎技術から応用技術、農業の理論などを丁寧に教えて下さった先生方の存在です。私は農大で生産技術コースという主に農産物の生産管理方法について学ぶコースに所属しており、そこで野菜の栽培について学んでいるのですが、入学当初は、中耕、間引き、誘引など栽培管理の用語を言われても何のことを言っているのか全く分からず、毎日農業に関する用語や栽培管理方法、理論などを覚えることに必死でした。そのような慌ただしい日々の中で当時のコース担当の先生は私に「農業も人生も地道にコツコツやることが大事」という言葉をかけてくれました。私はその言葉を聞いて焦らずに自分のペースで地道にやっていこうと思えられるようになり、あの時感じた肩がフッと軽くなるような感覚は今でも鮮明に覚えています。私はそれから、講義や実習などでの劣等感や焦りといった不安が無くなり、学びに対しての意欲がますます強くなっていき、毎日自分にとって未知の分野である農業を学べる喜びや楽しさを感じながら学生生活を過ごすことができ、今では学生自治会長を任せて頂けるなど、日に日に自分自身の成長を実感しております。また、私は学んでいくうえで知った農業の持つ多面的な機能や地域農業の現状にあらゆる可能性を感じ、ここ農大での学びを将来、実生活でも活かしていきたいと思い、今農大で勉学に励んでおり、諸先生方に講義や実習で教えて頂いた知識を地域農業の活力源に変える事が今の私の目標になりました。

また、もう一つの私の農業に対する先入観を変えるきっかけになったのは、何より仲間の存在でした。ここ徳島農大では、入学1ヶ月間は全員で寮生活を共にします。そこでの集団生活の中で私は、仲間を作り、遊び、時には喧嘩し、そして時には農業について本気で語り合う中で、とても刺激的な毎日を過ごす事ができました。これは、ある日友人が私に言った言葉なのですが、「今の俺たちがあるのは日本の農業を守ってきてくれたお年寄り達のおかげだ！だから次は俺たちがその意志を引き継いで次の世代へバトンを渡さなければいけない！」私はこの言葉を聞いて「えらいかっこつけた事言うな」と思わず笑ったと同時に友人がとても真剣な眼をしているのを見て、微力でしかないかもしれないけど自分も日本農業の為に頑張ろうと、とても胸が熱くなりました。私はこのような熱い友人達と出会えた事で人生の目標を持つ事ができ、今までよりももっと毎日を有意義に過ごせており、本当に農大に入ってよかったと思います。

今でも私の中に冒頭でも言ったように、農業の持つマイナスの要素は存在しています。しかし、今ではそんなマイナスの要素をも遥かに凌駕する程の楽しさや、可能性といったプラスの要素で満ちあふれています。私はこの先、地元のJAに就職しようと考えており、そこでここ徳島農大で学んだ知識や技術を活かし、農家の方々の力になれるよう努力していきたいと思います。最後になりましたが、農業を教えて頂いた諸先生方、2年間お世話になり本当にありがとうございました。そして、高く熱い志を持った仲間達、これからの地域農業をリードしていけるようにお互い切磋琢磨しながら頑張っていきましょう。

農業を学び通じて感じた事とこれからの目標

愛媛県立農業大学校
総合農学科一年　農産園芸コース
越智友紀

私の家は非農家です。普通科の高校を卒業し、農業は全くの未経験でした。そんな私が農大への進学を決めたきっかけは、知人から野菜を頂いたことです。家庭菜園で採れた野菜で新鮮でした。私は自分で育てた作物を人に届けたいと強く思い、農業の勉強をすることを決意しました。農大生活が始まり、充実した日々が送れています。

五月の下旬、西予市野村町にある畜産分校（畜産研究センター）に行き、一泊二日の畜産体験実習を行いました。わからないことだらけの実習で不安がある反面、楽しみもありました。

実習では養豚の体重測定をすることになりました。初めて訪れた豚舎の中では豚の鳴き声が響いており私は驚きました。まず、職員の人が豚を檻から体重計の所へ導くために大きな板を使い、すばやく計る見本を見せてくれました。私たちも職員の人の説明を聞き、実践することになりました。豚をうまく導くために豚の行くルートを読み取りそのルートに行かせないように板で押さえつけることを教えていただきました。また、豚の耳刻の読み方も教えていただきました。他にも、搾乳を見学したり、サイレージや圃場の整備を行いました。また、飼料分析の説明を聞いたり、牛舎の掃除などもしました。この実習で、改めて命の大切さ・畜産について学ぶことができました。

北海道農業体験実習では、約二週間、受け入れ農家さん宅に泊り込み農作業をしました。初めて訪れた北海道士別市という所で農大とは全く違う広さの圃場を目の前にしました。バスの車窓から見た広大な大地を悠々自適に過ごす羊達の景色が印象に残りました。私は酪農を営む農家さんに受け入れてもらいました。任された主な仕事は早朝と夕方、仔牛に干草と濃厚飼料を与えること、機械や倉庫の掃除でした。

餌を与える仕事では、サイレージを崩すことに慣れていないため肩や腕にかなりの

負担を感じました。けれど、任された仕事のため、諦めずに最後までやり遂げました。

機械の掃除では、愛媛で見る機械と違い、それは大きくて複雑な造りをしていました。私の身長がトラクターとほぼ同じで驚きました。訪れたときに見た圃場を耕し作物を収穫する時に便利だろうなと思いました。しかし、雨などの悪天候の場合は機械を動かすことが出来ず、作業が出来ないのが欠点でした。運転席を掃除する時、いろいろなレバーがあり驚き怖くなりました。それでも運転席から圃場を見渡した時の眺めはすばらしく感じました。私が研修を行った今年の九月は、例年よりも雨が多く満足な作業が出来ず残念でした。

この研修を通じ、士別市の広大な圃場を見て、農業の魅力や北海道の皆さんの農業に対する思いが伝わりました。どんな辛い出来事があっても諦めずに取り組む農家さんの姿はすばらしいと感じました。二週間の研修で貴重な経験が出来ました。お世話になった農家さんから学んだことは自分の財産となると思います。

十月に入り、コースに分かれて実習を行うようになり、私は農産園芸コースで花卉を専攻することにしました。バラ・トルコギキョウ・ユリなどの切花、ビオラ・パンジー・サルビアなどの花壇苗を栽培しています。実習で「底面給水」について学びました。この技術は底に溜めた水を吸い上げるため、通気性・保水性を上げる効果があります。開花後の花が上からのかん水により弱ることがないのがメリットです。この方法で萎れた植物が蘇る事も知りました。

畜産体験実習での豚の計量作業

農業を学び始めてから早くも一年が経とうとしています。私にとっては初の経験と驚きに満ちた一年でした。北海道研修ではいつか将来『大きな事』をやり遂げたいと思い、目標にしました。目標達成のために資格取得やたくさんの経験を積むことに励みたいと思います。残りの農大生活、農業の知識や技術を身につけられるように頑張ります。

農業を伝えるために

愛媛県立農業大学校
総合農学科一年　農産園芸コース
神市光輝

「農業高校出身で、実家でも農業の手伝いをしていたから農業大学校では有利に過ごすことが出来る。」入学当初はそう思っていましたが、実際には知らないことばかりで、予想とかけ離れていました。

僕は、デスクワークが苦手でどちらかというと圃場で体を動かすことのほうが性に合っており、九十分の授業は正直苦手でした。さらに前期の間は、実習がある週とない週が偏っており、実習がまったく無い週はまさに辛く感じました。

しかし辛いと思える座学でも「土壌肥料概論」という科目は唯一楽しみでした。この講義は作物を育てる上で欠かすことのできない肥料と土壌に関して学ぶ講義で、「土壌を無くしてしまっては農業ができない。」そう思うようになったきっかけです。

農大ではトマトを水耕栽培しており土を一切使っていません。しかし他の野菜は露地栽培もしくはハウス栽培を土壌で行っています。水耕栽培を行う植物工場では主に葉菜類の栽培をしていますが人が活動するのに必要なエネルギーの源である穀物はおそらく百年経っても植物工場における栽培は不可能だと思われます。

日本人の主食である米も水耕栽培できないのです。大切な主食を栽培するためにも土壌というものは必要不可欠なのです。土壌というのは長い年月を経てできた農業をするための貴重な宝です。しかし現在では土地開発等によりその貴重な宝を失っています。土壌がコンクリートなどの下に埋もれてしまっているのです。こうなってしまっては圃場として二度と使うことが出来ません。

土壌で学ぶ私たちが土壌を失うわけにはいけません。しかし、耕作人のいないいわゆる「耕作放棄地」が多いのも現状です。耕作放棄地が増える一因として考えられるのは農業の担い手の減少です。私は農業の担い手を減らさないために「営農指導員」になりその地域で一丸となって新規就農者を確保し、農業を教え伝えて行こうと思います。

そのためにもまずはこの農大で農業指導ができるように学びたいと思っています。しかし、農業は地域や、農家一人ひとりで方法や考え方が違います。農業はまさに十人十色の世界です。僕が実家でやってきたことも、農大の実習では違う方法だったし、農大だけではなく、九月に研修で訪れた北海道は規模からして違っていました。人に教えることの難しさはここにあると思いました。

私は営農指導員を目指し、まずは農大や農業高校の「実習助手」になることも考えています。ただ先生に言われたことをやるだけでなく、学生に教えられるようになるために、農業技術検定・機械の運転免許などの資格を取りたいと思います。

私はこれらの他にもうひとつ夢があります。それは「観光農園の開設」です。先日、先進事例研修で「ヤマサ園芸」を訪れました。ここは典型的な観光農園で多くの人が訪れていました。私も、近年広まりつつある、『グリーンツーリズム』をすすめ、疲れた人を癒すことのできる農園を作り、人の役に立ちたいと思っています。

自然と触れ合うことは心の癒しになります。僕は生まれた時から自然に恵まれた土地で過ごして来てその事を実感しています。それを多くの人に知ってもらい、広めるためにも自分が人一倍農業に詳しくなりたいです。指導員はその前準備でもあります。

私は十二月に徳島県で行われた「四国地区意見発表会」に参加しました。そこで、四国四県の農業大学校に通う代表者の皆さんの将来の夢や考えを聞きました。そのほとんどの人が農大で学ぶことによって多くの知識を身につけ、きちんとした将来設計をしていました。私は発表を聞いて、私が農大で過ごした九ヶ月間は一体は何だったのだろうかと思いました。目標は持っていても、達成するために頑張ってきたのか・・そう考えさせられました。

トマト栽培管理実習

残り少ない一年間を有意義に使い自分が目指す道を可能なものとするためにも、毎日の講義や作業の中で疑問を見つけ、自らの力で解決に結びつけることができるよう精進したいと思っています。

一年間を振り返って

愛媛県立農業大学校
総合農学科一年　果樹コース
森山翔平

私の家は長崎で柑橘栽培をしています。そんな私がなぜこの農大に入学したかというと、理由は大きく分けて二つあります。

まず一つ目は、私の家は柑橘栽培をしており、私も将来家を継ぎたいと考えていますが、ここ愛媛県は柑橘の生産量が一・二位を争う県であるため、将来の役に立てればと思い愛媛県立農業大学校を選びました。

二つ目は、私の父が愛媛県立農業大学校の卒業生だったことです。そのせいもあって私は小さい頃から父に学生時代のことを聞かされて育ちました。楽しいこともあり、厳しかったこともあると言っていました。次第に私も「農大に行きたい」と考えるようになりました。そして私は、長崎県諫早農業高等学校を卒業し、愛媛県立農業大学校に入学しました。

入学式の日、私は時間ギリギリで到着し最後でした。私が教室に入った瞬間に皆からの鋭い視線を感じました。入学式も終わり、部屋で待機の時、同室の人と話をしました。見た目はとても怖かったですが話していく内にとても面白い人だとわかりました。その後も一緒に行動をし、夜は二人で夜遅くまで話をしていました。好きな物、趣味、今時のニュースだったり、何気ない会話でしたがとても面白くついつい話が進んでしまうほどでした。

次の日から講義が行われました。最初は簡単な授業が多かったのですが、徐々に難しくなっていき、特に英語と法律がわからなかったです。私は高校の時もあまり英語が得意ではなかったのでとても大変でした。法律は全然勉強したことがないので簡単なことでもわからないことが多かったです。

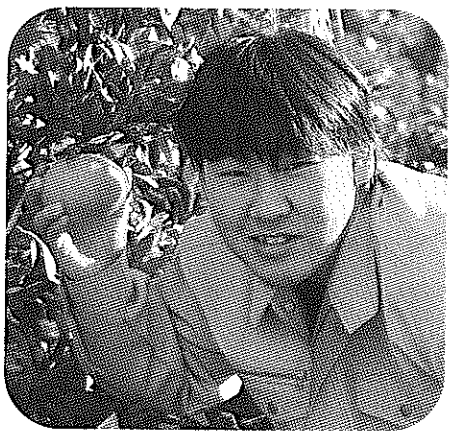
それとは対照的に私には得意な授業がありました。それは情報処理と実習です。私は高校の時に授業でパソコンをした経験があり、そこで私は情報処理二級の免許を取り、ある程度まで操作することができました。

また、実習は高校の授業でもあり、家でも農作業をすることが多かったので割と楽な方でした。しかし、私の家は柑橘しか栽培しておらず、高校の時も割と簡単な作業が多く、難しい作業はしていませんでした。しかも農業大学校では柑橘に加えて、ブドウ、キウイ、モモ、ナシが栽培されており、わからないことも多くありました。

その中でも特に難しかったのがブドウです。ブドウの形は市場で売っているような形に自然にはならず、摘粒をして形を整えてから出荷します。摘粒作業は初めてでとても難しかったです。

それと、この前の授業でキウイの剪定作業をしました。初めて剪定作業をしたので何をすればいいのかわからず、先生の説明を聞いて頑張ってみましたが、よくわからなかったので、また先生に聞いて説明してもらいました。先生曰く、「間違っていいからとにかくやってみろ」ということで、なんだかわからないまま剪定をしました。しかし、だんだんやっていくうちにコツを掴んできました。それでもわからないところは、再度先生に質問し、どれを切っていいのか改めて説明を受け作業を行いました。

その他に、ナシの防除作業を行いました。


愛媛でしか栽培されていない‘甘平’

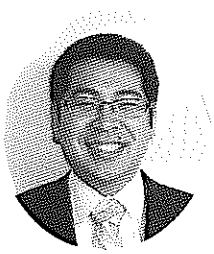
防除はやったことがなかったけれど、感想は一言で言うならば「キツイ」が一番合っていて腰が痛くなりました。

今後の勉強で頑張りたいことは接木作業で、重点的に習って我家でも役立てて行きたいと考えています。また、柑橘で関係のある作業を習って長崎に帰り、その技術を使っていきたいと思います。我家では除草剤を使わず草刈り機を使うので、そういう伝統なども残しつつ、自分の理想とする農業をしていきたいです。

農業はキツいけれど、作物が実って収穫の喜びは格別です。私は、自分が作って育てた果実を高く買って貰えるように頑張って農業をしたいと思います。残りの学生生活を楽しみつつ、勉強は全て自分のためになるので、色々と覚えて帰って役立てて行きたいと考えています。また、困ったことが起こったら先生が言っていたことを思い出し、苦難を超えて行きたいと思います。

更なる農大の進化を目指して！私がチャレンジしたこの一年

愛媛県立農業大学校
総合農学科二年　農産園芸コース
山本潤也



今年度、愛媛県立農業大学校で、新たに取り組み始めたことを紹介します。

一つ目は、今年度四月より、二匹のヤギを学校で飼育し始めたことです。二匹のヤギは、日中「除草

隊」として、学校の圃場を歩き回っています。また、毎週水曜日に開催している農大直売所や収穫祭などのイベントに登場し、愛媛農大のアイドルとなっています。ヤギの珍しさからか、子供はもちろん、大人の方にも多く触れ合っていただいており、徐々に知名度を上げています。

二つ目は、農産園芸コース二年の野菜班では、学生が主体となり、近所の保育園との交流会を開催しました。七月にサツマイモの植え付け体験、八月に植えたサツマイモの生育観察と学校で栽培したスイカの試食、十一月には芋掘り交流会を行いました。およそ二aの畑を学生と園児が一丸となって植え付けを行いました。私たち学生も、教える立場になることから、どんな風に教えたらいいのか、どのように接したらいいのか色々と考えました。

昨年の夏は猛暑続きで生育が心配されましたが、十一月の芋掘り交流会では、たくさんのサツマイモが収穫でき大喜びでした。また、収穫したサツマイモは、学生が作った焼き芋機で焼き芋にして振る舞いました。園児の喜ぶ姿を見て、私たち学生も嬉しく感じました。この芋掘り交流会では、地元のテレビ局や、日本農業新聞などの報道機関に取り上げていただき、愛媛農大のPRになりました。

保育園児との芋ほり交流

三つ目は、私のプロジェクト活動の一環でもありますが、毎週水曜日に開催している農大直売所の活性化に取り組みました。チラシでの宣伝や、規格外品を用いて詰め放題の実施、ヤギとの触れ合いの場を設けることを行いました。その結果、今年度の売上げが、昨年度よりおよそ五十万円増加し（十二月末現在）、来客者数も昨年度の二倍になるなど農大直売所の更なる盛り上がりを実現することができました。

四つ目は、今年度より学生自治会で、「農大新聞」を発行するようになりました。月に一回の発行を目指し、学校のイベントなどを中心とした記事を学校内やホームページなどに掲載しました。こちらも、日本農業新聞に取り上げていただき話題となりました。

このように、今年度は、様々なことにチャレンジし、私も自治会長として毎日がとても充実した日々になりました。

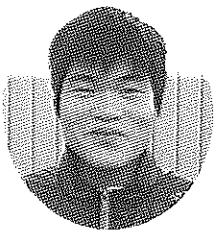
私は、来年度より地元の大学への編入が決まりました。先生方のご協力により、このような道に行けるようになりました。愛媛県立農業大学校では、実践的農業を中心に学びましたが、大学では、理論を中心に勉学に励みたいと思っています。そして、全ての人に感謝の心を忘れず、自分の目標でもある「農業高校の教員」を目指してこれからも努力し続けたいと思っています。

最後に、卒業生の皆さんは、これから様々な道へと進みますが、この農業大学校で学んだことを忘れず、頑張っていきましょう。

農大のアイドルヤギの
ヤギ吉とメイ

農大に入学して感じたこと

高知県立農業大学校
園芸学科一年　野菜専攻
小松大悟



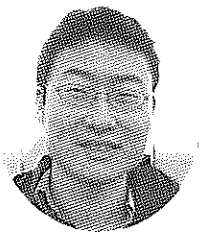
僕の家は、ハウス西瓜を栽培している農家で、小さい時から祖父や父が作業をする姿を見て育ち、自分も家の跡を継ごうと思いました。幼いころから忙しい時には手伝うようになり、徐々に西瓜に対する扱い方が分かり、上手になっていきました。その後、農業高校に進学し、農業についての知識や技術を学びました。高校では、そんなに前に立つタイプでもなく、役員なんて自分にはできないと諦めていました。高校卒業後はさらに知識や技術を学びたいと思い農業大学校に進学しました。農大は一年の間は寮生活なのですが、僕は初めてだったので不安ばかりでした。でも、あっという間に月日は流れ、寮生活にも慣れ、いつしか不安はなくなりました。

この学校は、実習がメインで、それぞれ一人一人が選んだプロジェクト課題があります。僕が最初に選んだのはナスです。ナス作りは初めてなので分からないことだらけでしたが、先輩も優しく教えてくれました。今は、ナスのパイプかん水とチューブかん水とで、品質や収量にどのような違いが出るかについて調査しているので、作業をしていく上でやればできるんだいうことも分かって、自信がつきました。病気で食べることが不自由になった祖父に、以前僕の家で作っていた自種西瓜を持っていくと祖父が種を除けずにそのまま食べることができると喜んでくれました。

将来就農したら、これを自分のブランドとしてどんどん広めていきたいです。

役員になって思うこと

高知県立農業大学校
園芸学科一年　野菜専攻
大坪盛也



今回、私は自治会役員の会計となりました。経理及び広報、寮生会との意見調整を任されました。責任を感じると共に自治会役員に選出されたことにやりがいも感じています。経理と広報は、私にとって携わったことがなく、よく分からない分野ですが、周りの方々と助け合って、精一杯やれるように努力します。

ここ、農業大学校では、毎日圃場に出て農作業をしています。しんどい時や辛い時もありますが、新しい発見や知らないことを知った時に、やりがいを感じています。そういった経験こそが農業大学校での生活

において大切なことだと私は考えています。農作業は、農業大学校へ入ってから本格的に行いました。そこで私は、「やってみないと分からないことがたくさんある。」と実感しました。頭で想像するのではなく、人に聞いて納得する理解でもなく、実際に行動して確かめることが一番良い方法だと思います。それで、私は、今後もたくさんのことを体験していき、農業のノウハウを吸収していきたいと意気込んでいるところです。

農作業と勉強と役員。やるべきことは数多くあると思いますが、できるだけ頑張りたいです。

自治会書記として

高知県立農業大学校
園芸学科一年　野菜専攻
白木達也

私の家はショウガ、文旦を主とする専業農家で、物心がつくころには両親と祖母は毎日朝早くから夜遅くまで農作業に勤しんでいました。今では私も毎年ショウガの植え付けや収穫、ブンタンの収穫や荷造りの時期は、休みの日はほとんど一日中手伝いに明け暮れています（もっともその後でもらえる小遣いが目的ではありましたが・・・）。2、3年前から祖母は年をとってきたせいか「達也に手伝ってもらいたい」とか「達也が百姓をしてるところを見たい」とか言うようになりました。

私は、昔から手伝いをしている中で農産物の販売に興味を持ち、コンピューターや情報処理の勉強をして役立てようと考え、高知市内の商業高校に進学していたのですが、今までいつも優しくて小遣いもくれていた祖母にそのように言われると、何か役に立たないといけないのかなと思えてきました。それに輪をかけて両親も、「絶対に後を継いでくれ」などと言ってきます。

そう言われるとだんだんその気になってきて、農業の勉強をしっかりしてみよう、しかし自分がやるのであれば、これまでのように手伝いばかりでは面白くない、自分で考えて何か作りたい、そのためには自分で作物の栽培ができる農業大学校で勉強しよう、と今年から本校で学ばせてもらっている次第です。

実習では今まで食べていた食材を、初めて種まきからスタートし、生長していく過程を見守る楽しみを知りました。

平日の朝晩や土日も当番があり、主に収穫や選別、出荷をしています。他に時間があれば作物の世話をしたり、道具の手入れなどやることが多く大変ですが、自分たちが作った品物が売れるのはうれしいです。また病害虫や植物の生育の良し悪しを見る目を養うためにいろいろ知らなくてはいけないことがあると思いました。

勉強では、今まで農業について学んでいなかったので大変ですが、コツコツと頑張っています。

学校では実習と勉強ばかりでなく、寮生活で多くの友人に恵まれました。寮は人と関わる時間が長いので、自然と仲良くなれます。初めてのよさこい祭りでは、異常気象ですごく暑かったのですが、仲間と声を出して楽しくやれ、踊れて思い出になりましたし、普段から外でサッカーやバスケをしたり、一緒にテレビを見て笑ったり、盛り上がったりで楽しく過ごせて一年が過ぎようとしています。

今回、思いがけず自治会書記という大役になり、自分でも少々不安を感じていますが、ほかの学校生活とともに頑張っていきたいと考えています。一年間よろしくお願いします！

農業大学校に入って

高知県立農業大学校
園芸学科一年　花き専攻
伊藤真敏

私の家は非農家です。ですから、私自身農業の経験がなく、作物を一から育てたこともない素人です。最初、私は農業に対して、あまり関心がありませんでした。しかし、農業大学校に入学し、実習を通して、私は農業の大変さや、やりがいというものを知ることができました。特に、私が苦労したことは、入学当初の実習の時間です。その時の私は、あつかう作物についての知識が全く無く、何をしていいのか分からなくて、定植、調整・出荷作業、どれも大変苦労をして、先生方や先輩にご迷惑をかけました。また、作物を育てていると、病気や害虫が発生して、その度に発生した作物の除去をし、薬散しなければならなくて、農業は大変だと感じました。しかし、こういった苦労の反面、初めて作物を一から育てて出荷することが出来た時には、やりがいを感じることができ、農業に対して一層強い関心を抱くようになりました。

私は、農大で花きを専攻しています。花き科では、様々な花を育てるとともに、その栽培した花を使って、フラワー装飾を学びました。私は、フラワーデザインを今までしたことがありません。だから、初めて作ったときはすごく嬉しかったです。季節によって使う花は限られて大変ですが、その時期に相応しいアレンジメントを作ったり、自分で花の配置を考えながら作ることは、本当に面白いと感じました。

また、私は、ここでトルコギキョウという花をプロジェクト課題の作物として栽培しています。この花は、栽培が難しいそうです。でも、頑張って育てていきたいと思います。

農業大学校では、これから多くのことを学んでいくことになると思います。ここで学んだことをこれからの私の将来につなげていきたいと思います。

農業大学校に入って

高知県立農業大学校
園芸学科一年　果樹専攻
森沢実智哉

私の家は梨農家ですが、農業大学校に入学するまでは農業に深くかかわることがありませんでした。高校

までは自分の好きな部活を優先させていたので、農業に関しては素人同然の私ですが、農業に興味がなかったわけではありません。家で食べる梨はおいしく、このおいしい梨を自分で作って、みんなにこの梨の味を広めることが私の夢です。

農大に入るまで農業に関する勉強をしたことがなかったので、農業基礎などのテストがよくできませんでした。また、実習では、家でもたまにしか手伝うことがなかったため農薬なども使ったことがなく、作業について先生方に聞くことばかりで迷惑をかけてしまいました。ですが、実習などを繰り返すうちに防除や草刈機などの使い方がわかるようになり、実習にやりがいを感じるようになりました。ですが、今の私ではまだ未熟で、おいしい梨を作ることができないと思います。このため、これからも自分の夢のために、これまで以上に農業のことなどをを学んでいきたいと思っています。

学生生活について

高知県立農業大学校
園芸学科二年　野菜専攻
岡村　翔

二年間、農大で生活する中で大変なことがたくさんありました。日頃から行なう実習や勉学、行事のよさこいや販売実習です。

実習では、暑い日も寒い日もハウスに入り作業をし、一生懸命にプロジェクトをする毎日でした。しかし、現在ではプロジェクトの作も終わり、まとめをする毎日です。

よさこいは、昨年は非常に暑かったので、正直練習するのは嫌でした。しかし、本番は全員楽しんで踊ることができたと思います。たくさんのチームが参加しており、熱中症で倒れる人も出るほどでしたが、たくさんの方からの支えもあり無事に終えることができました。

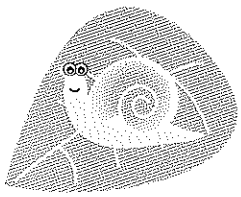
販売実習では、天気が悪い中、たくさんの方が足を運んでくださり、ほとんどの販売物が完売しました。自分達が栽培したものがすぐに完売する光景を目にして嬉しかったことを今でも覚えています。

私は、卒業後は就職します。その前に、農大祭というイベントがあります。一年生と作業する時間も残り少ないので、農大祭を楽しんでできたらいいなと思っています。

さらに、今回、自治会の副会長になっていろいろな経験をできたので、新自治会になる方に伝えて新たな自治会の役員として頑張ってもらいたいと思います。

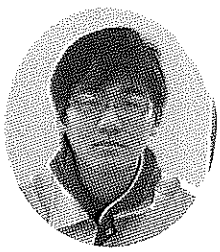
たくさんの方々に支えられながら、今回、自治会の仕事を無事終えることができました。

ありがとうございました。



人と人

高知県立農業大学校
園芸学科二年　果樹専攻
谷脇友斗



この一年、自治会役員として物事をこなしてきましたが、一番の思い出はよさこいです。その中でも、寄付金集めが印象的でした。具体的には、寄付金を募るための文章作成、電話による受け答え、依頼相手とのスケジュール調整などをしました。その中で感じたことは一人では何もできないということです。私の学校では、私の他にもう一人副会長がいますが、文章作成やスケジュールの組み立て方について教えてくれました。私は依頼相手とのコンタクトを主にして、役割分担することで問題なく寄付金を集めることができました。私は文章を考えることや計画を立てることが苦手です。しかし、今回の件で改めて、協力してくれる人の存在がいかに大きいか分かりました。正直言うと、自分一人で何とかしようと思った時もありましたが、もう一人の副会長をはじめ、会長にはアドバイスをもらい、先生のサポートや友達にも作業を手伝ってもらうことで問題なくよさこいができたと今でもしみじみ感じています。そして、自分ができないことは人に頼ってもいいと分かりました。このことを活かすために、自分ができないことは、はっきりと意思表示し、相手に協力を求める意識を高めていきたいと思います。そして、将来的には気軽に助けを求め、求められる存在になっていきたいです。

農業大学校での二年間

高知県立農業大学校
園芸学科二年　野菜専攻
池本将馬

この学校に入校して、二年が経とうとしています。農大での生活は、夏のよさこい祭りや秋の農大祭やスポーツ大会など、たくさんの行事があり、とても充実した日々でした。入校して間もない頃は、工業高校卒業のため、普段の実習や授業についていくのもやっとでした。また、人見知りが強く、馴染めるのか不安でした。しかし、農大での仲間たちは明るく楽しい人達ばかりで、だんだんと学校に行くのが楽しみになりました。自治会役員になって、よさこい祭りの指導をする機会があり、一年生に教えるのにとても苦労しました。しかしながら、本番ではみんなが踊りを覚えることができたので、やってよかった、という達成感を味わうことができました。よさこい祭りでの思い出は、自治会としても、一人の学生としても、とても大切な思い出になりました。農大での生活を通して、農業の知識や技術の他にも、いろいろな人との出会いがあり、自分自身も成長できたように思います。社会人なってからも、農大で学んだことを活かして、頑張っていきたいです。